

大名家をも潤した湧き水

親藩・譜代の大名屋敷が広大な敷地を構えた紀尾井町。
ハイソな街並は現在に至るまで変わりません。

麴町大通りからいちよう坂を進むと清水谷へ続く坂に出ます。尾根道から一気に谷へと下りていくこの場所は、明治維新三傑の一人であった大久保利通が暗殺された紀尾井坂の変が起こった地点でもあります。

用されました。古地図にも大きく「溜池」と記載が見られます。現在では溜池は埋め立てられ、地名として「溜池山王」が残っています。

坂を下りきった先には紀尾井町通りが伸び、都心のオアシスである清水谷公園が広がっています。「清水谷」という地名は水が湧いた場所だから付いたといわれていますが、台地から下った先の低地で水が湧くことも、地形のデコボコが強調された地図を見れば理解しやすいのではないのでしょうか。

「紀尾井」という名は、紀州徳川家、尾張徳川家、彦根井伊家のそれぞれ1文字を取って付けられました。親藩の2家は、地域の水源を管理する重要な役割も担っていたようです（残り1家の水戸徳川家は後楽園で玉川上水を管理）。

高所の台地にあった尚泉水（井戸）と比べると、人がどのように生活用水を得ていたのかがよくわかります。

名立たる大名らの屋敷として取られた広大な敷地は、明治時代には宮家の土地として、その後は大学や高級ホテルに受け継がれ、番町・麴町が現在も変わらずハイソな地域であることに貢献しているのです。

ここから湧いた水は南側に溜池として蓄えられ、この地域の生活用水として活



▲現在はポンプで水質を管理



▲2年に1度の山王祭では各町会の御神輿が勢揃い